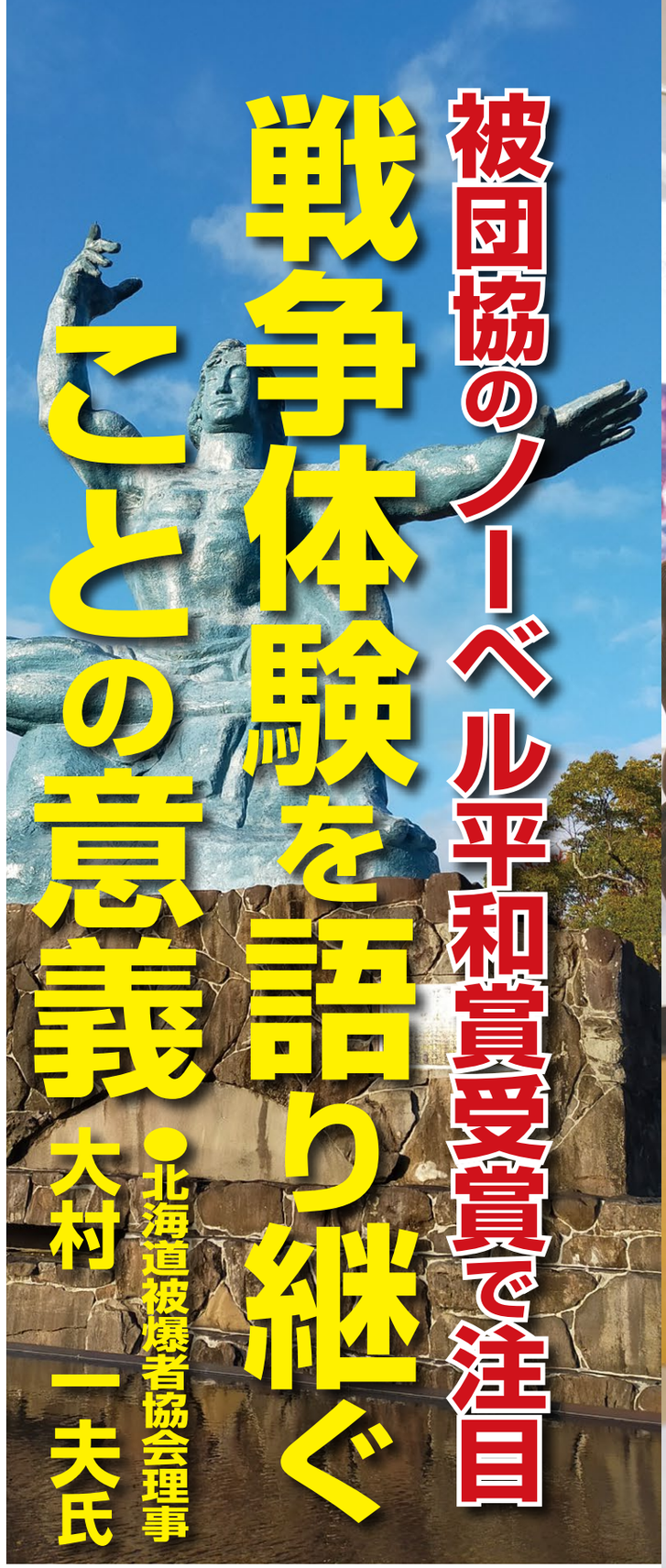
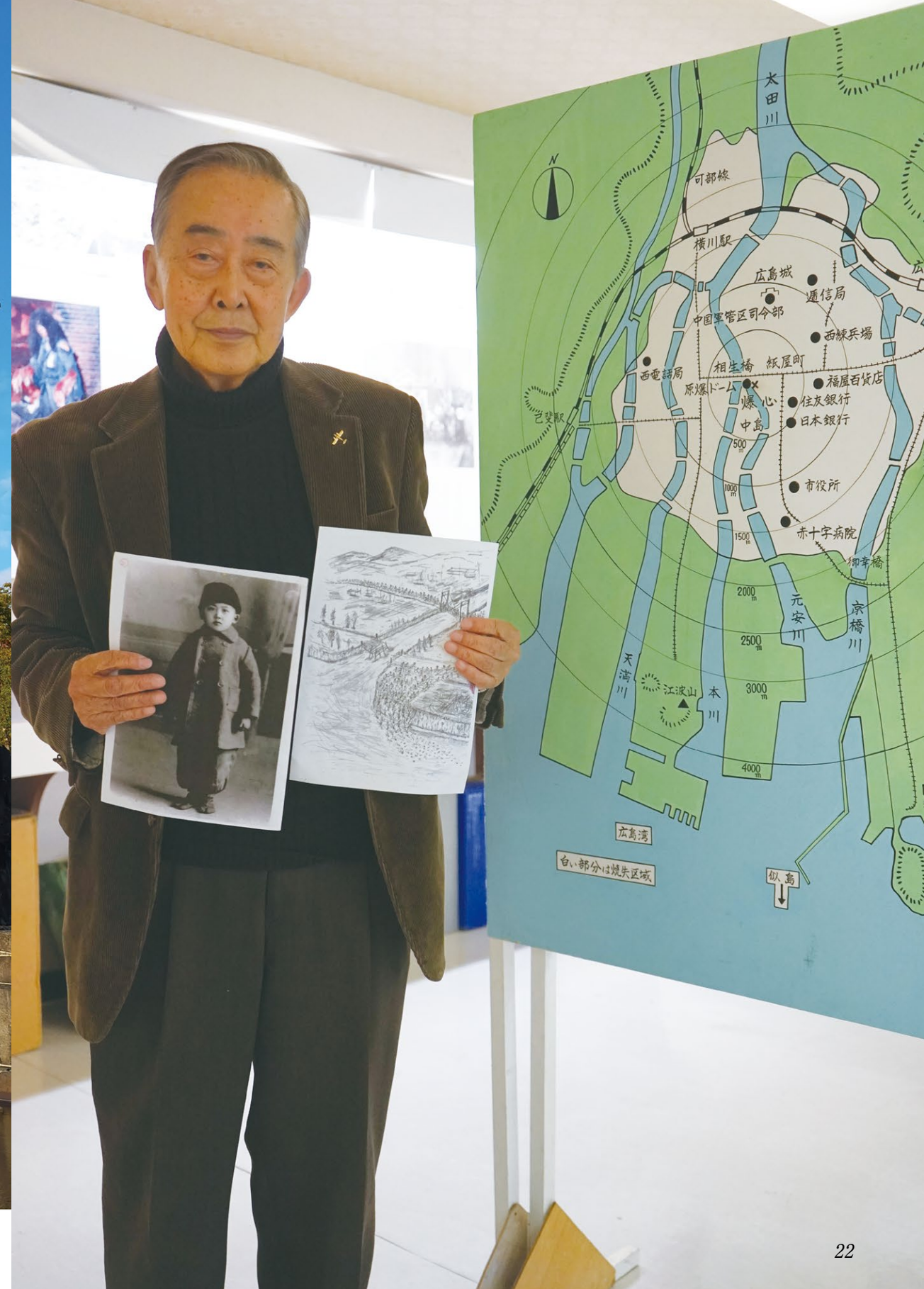
被団協のノーベル平和賞受賞で注目

戦争体験を語り継ぐことの意義

北海道被爆者協会理事 大村一夫氏





昭和100年の今年は、広島と長崎に原爆が投下されて80年。悲惨な戦争の記憶が薄れゆくなか、世界に目を向ければ、ウクライナやガザでの戦闘は収束の兆しがみえず、核の恐怖が高まっている。そうしたなか、長年にわたって平和の尊さを訴え続けてきた日本原水爆被害者団体協議会（以下、被団協）が昨年のノーベル平和賞を受賞したことは、かくも殺伐とした時代に一縷の希望を与えてくれたといえるだろう。

1960（昭和35）年に結成された北海道被団協の流れを汲む北海道被爆者協会は、道内で精力的に活動を展開してきたが、3月末での解散が決まっており、今後は北海道被爆者連絡センターが組織を継承する。2017（平成29）年から語り部として独自のコミュニケーション方法を用い、若い世代に戦争体験を伝えている大村一夫さん（84）に話を伺った。（フリーライター・内海達志）

若者の心に響く言葉で「語り部」活動続ける

取材場所に指定されたのは「ノーモア・ヒバクシャ会館」。白石区の「平和」駅近くに建つ、「平和」を願う人たちの活動拠点だ。広島の原爆ドームを模したオブジェが印象的で、壁には被団協のノーベル平和賞受賞を祝う垂れ幕も掲示されていた。

北海道被団協は追悼式などの行事を開催し

続きは『月刊クォリティ』本誌をご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
https://qualitynet.co.jp/koudoku/

○お電話でのお申し込みはこちらから
TEL 011-644-0101
（9:00 ～ 17:30　土日・祝日をのぞく）